Shinshu University Institutional Repository SOAR-IR

共通語の普及

著者	細野 哲雄
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 2: 37-38(1983)
発行年月日	1983-04-17
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022356

(C) 1983 the Author.

随想

共通語の普及

細野哲夫

教育について何かを論ずるとなると、その不十分な問題点やマイナスの面だけを取りあげて論評する傾きが強いようであるが、物事を的確に見据えていくためには、マイナスの面だけではなく、大いに成果をあげてきたプラス面をも見落さないようにしていくことが大切であろう。

さて、明治以来学校で行われてきた国語教育の中で、大へんすぐれた成果をおさめたものは何であろうかと考えてくると、共通語の普及ということが頭に浮かんでくる。周知のように、明治初期に近

代的な学校制度が導入されて以来、共通語（戦前には標準語という用語が多く使われていた）の普及ということが国語教育の重要な目標の一つであった。

戦前においては、書き言葉としての共通語は教科書などによって着実に浸透していったものの、不便な地方では共通語による生の話し言葉を耳から聞くという機会が乏しかったために、話し言葉となると発音になまりがあってどうもうまくしゃべることができないなど、思うようには成果はあがらなかったわけである。

ところが、ここ二、三年ばかりの間におけるテレビの普及、道路の整備と交通機関の目ざましい発達などによって、どこに住んでいても生の共通語を耳から聞くことができるようになってきたため、話し言葉としての共通語もどんどん普及していき、大きな成果をあげてきている。

つまり、共通語の普及という点については、国語教育の成果を高く評価してよいと考える。

ところがその反面、最近は地域地域の生活に根ざした方言がどんどん姿を消していくのを惜しむ声を聞くことが多い。日本全国、どこの都市の駅前に立って眺めても、同じようにコンクリートの殺風景なビルが立ち並んでいて、地方色がすっかり失われ味気無くなってきたのを嘆きたくなるのと似たような気持であろうか。

しかし、共通語の普及に反比例して方言が姿を消していくのは当然のことであるとばかり短絡的に考えるわけにはいかないのであって、これには現在の日本がかかえている特殊な条件が大きく作用していると言わざるをえまい。

ごく大ざっぱな言い方をするならば、日本人の生活基盤が大地に根ざした農本主義から効率本位の工業立国へと大きく急回転してきたため、生活用語としての方言を生み育ててきた土壌がまるでブルトーザーで掘りおこされ削りとられていくように急激な変貌をとげ、すっかり荒されてきているわけで、問題はこの点にある。

生活用語としての方言は、それを生み育ててきた土壌が豊かに肥えていてこそ、生き生きと伸びていくものであろう。その土壌がすっかりやせ、画一化されてしまっては方言も伸びようがなくなる。

（清泉女学院短大教授）